

## 一陰一陽と三陰三陽

——象数易と『黄帝内経』の陰陽説——

白杉悦雄

はじめに

『黄帝内経』の陰陽説を考える場合、先ず問題になるのは三陰三陽説である。この医学に特有な三陰三陽説は、『黄帝内経』の重要な医学理論の一つであるにもかかわらず、その由来や内容が十分に明らかにされたとは言えない。また、『黄帝内経』に収められているいくつかの論文では、三陰三陽と一陰一陽との間の差異が問題にされ、両者を関係づけようとする試みもみられる。しかし、それらの論文はまだ十分に解説されていないように思われる。小論はその中の脈解篇を取り上げ、主に三陰三陽と一陰一陽の關係に即して陰陽説の問題を考えようとするものである。

『黄帝内経』の名は、『漢書』芸文志の「医経」の項に、「『黄帝内経』十八卷」としてみえる。現存する標準的なテキストは、『黄帝内経素問』二十四卷と『黄帝内経靈樞』十二卷（以下『素問』『靈樞』と略す）であり、『素問』は唐代の王冰の注にかかる。もう一つのテキストは、『黄帝内経太素』三十卷（以下『太素』と略す）で、隋

末から唐初の人といわれる楊上善の編注したものである。<sup>1)</sup>

一九七三年に長沙の馬王堆三号前漢墓から出土した帛書医書中の「足臂十一脈灸經」と「陰陽十一脈灸經」には、それぞれの脈（經脈）について、脈の経路の記述の後にその脈の変動によつておこる症候や病名が列記されている。「陰陽十一脈灸經」では「是れ僮（動）ずれば則ち…を病む」と症候を記し、ついで「其の産む所の病は…」と病名を列記している。「足臂十一脈灸經」では「是僮則病」という形式の記載はなく、ただ「其病…」として病名を列記する。この症候・病名の記述形式・内容は、「黄帝内經」（以下、「内經」と略す）にほぼ継承されている。「靈枢」経脈篇（『太素』卷八首篇。以下、経脈篇と略す。）は脈の経路の記述の後に、「是動則病…」「所生病者…」と症候・病名を列記して、「陰陽十一脈灸經」の記述の形式をそのまま踏襲する。また、出入りはあるものの、その症候・病名にはしばしば一致もしくは類似する表現がみられる。<sup>3)</sup>

『内經』には、上に述べた脈の乱れによつておこる病症を注釈する二篇の論文が収められている。『素問』陽明脈解篇（『太素』陽明脈解）と脈解篇（『太素』経脈病解）である。陽明脈解篇は、足の陽明脈の病症だけを扱い、陰陽五行説の立場から注釈する論文である。一方、脈解篇は、六つの経脈を取り上げ、陰陽説の立場からその病症に注釈を加える。経脈は太陽・少陽・陽明の三陽と太陰・少陰・厥陰の三陰で示され、手足の区別はないが、その内容から足の経脈を主とすることがわかる。

『内經』に収められている論文の叙述形式は、問答形式と論述形式に分かれ、問答形式が大半を占める。陽明脈解篇は問答形式、脈解篇は論述形式の論文である。論述形式のものは、さらに、ある主題についての專論と先

行する論文を注釈するものがある。後者の好例としては、『靈枢』小針解篇がある。小針解篇は、『靈枢』九針十二原篇（或はその祖本）の字句にたいする注釈である。例えば、九針十二原篇の「小針之要、易陳而難入、麤守形、上守神、……」について、小針解篇は「謂ふ所の易陳とは、言ひ易き也。難入とは、人に著き難き也。麤守形とは、刺法を守る也。上守神とは、人の血氣の余り有ると足らざるとを守り、補写すべき也。……」と、字句の一点に懇切丁寧な注をつけている。記述形式からみて、また先行する論文の注釈であるという点では、脈解篇は小針解篇と同じグループに属する論文であるが、両篇の注釈の性格は全く異なっている。「所謂：者」という形式で引用した字句にたいして、脈解篇ではその字句の意味をたどることは全く行なわれていない。脈解篇の注釈の方法は、先ず天地自然の陰陽の氣を言い、それをもって人体の氣の状態の説明とするものである。したがって、その記述形式にもかかわらず、脈解篇は病症を注釈する論文としてではなく、先ず陰陽論としてみるべきものである。

### 一、十二消息卦にもとづく病症注釈例

脈解篇は、三陰三陽に分類された三十四組の、病症の引用文とそれにたいする注釈文とによって構成されている。三陰三陽は十二支・十二月に配当される。太陽は正月・寅に、少陰は九月・戌に、陽明は五月・午に、太陰は十一月・子に、少陰は七月・（申）<sup>4</sup>に、厥陰は三月・辰に配されている。病症は、原則として三陰三陽が配されている各月における陰陽の氣の消長によって説明されている。注釈の主要な立場は陰陽消息観であるといつてよい。

一年十二月の氣候の推移を陰陽の消長の理によって説く例は、時令の中にその萌芽がみられるが、前漢末期の象数易に至って、陰陽の消長が卦爻の上に具現され、一年十二月及び十二支を十二卦に配当して、この十二卦をもって陰陽の消長を説くことが広く行なわれるようになった。脈解篇には、「易」や「卦爻」に直接言及する文はみえない。しかし、陰陽消息に基づくその注釈には、明らかに十二消息卦を前提にしていると考えられるものが含まれている。

以下では先ず、病症の注釈が十二消息卦の陰陽消長によつていられると思われものを中心に脈解篇の記述を検討してゆく。なお、各経脈の病症とその注釈の組を経脈ごとに脈解篇の記載順に算用数字で表した。

太陽—1 謂ふ所の「腫れ、腰・腫痛む」とは、正月、太陽、寅なり。寅は、太陽也。正月、陽氣出でて上に在り、而れども陰氣盛んにして、陽未だ自ら次することを得ざる也。故に腫れ腰・腫痛む也。

「腰腫痛」の腫は、尻のこと。この病症は、「陰陽十一脈灸経」の足の鉅陽脈の所産病、「足臂十一脈灸経」の足泰陽脈、また経脈篇の膀胱足太陽脈の所生病にみえる。しかし、「腫」はいずれにもみえない。

正月・寅は十二消息卦では泰☳にあたる。唐の李鼎祚の『周易集解』（以下、『集解』と略す）乾卦九三に引く干宝注に、「陽 九三に在り、正月の時、泰より来るなり、陽氣始めて地上に出でて接して物を動かす」と。しかし、四爻から六爻までは陰爻で陰氣もまだ盛んである。『集解』泰卦六四に引く虞翻注に、「三陰 陽に乗りて、之が応を得ず」と。したがって、陽氣はまだこの月を完全には主ることができない。脈解篇は、この後ただちに「故に腫れ、腰腫痛む也」と結ぶ。ほとんどの病症注釈においては、天地万物の陰陽の消長が明らかにされると

そこで注釈が完了する。注釈の中で蔵府経絡などの人体に言及するものは、全三十四例のうち七例に過ぎない。

太陽―4 謂ふ所の、「耳鳴」とは、陽気万物盛んに上りて躍る。故に耳鳴る也。

この病症は、二つの「灸経」・経脈篇のいずれにもみえない。あるいは、「陰陽十一脈灸経」に「耳彊」とあるのがそれか。『靈枢』経筋篇の「手太陽之筋」に、「其の病は：耳中に応じて鳴痛す」とある。

この月は陽気が盛んであり、万物の気も躍り上がろうとする。しかし、まだ上に達すべきときではないので、陽気が耳を衝けば耳鳴りという病症が現れる。この注釈は、『易』乾卦九四の爻辞の「或いは躍らんとして淵に在り」を思わせる。乾卦九四の陽爻は、十二消息卦の大壮三三に由来するというのは、干宝の説くところである。

『集解』乾卦九四に引く干宝注に、「陽気 四に在り、二月の時、大壮より来る也、四は虚中也、躍るとは暫く起るの言、既に地に安んぜず、而れども未だ天に飛ぶ能はざる也」と。大壮は二月の陰陽を象る。したがって、正月に陽気が盛んになりすぎて第四爻の位置まで上るのは、気が時に先んじて至る太過の状態を表している。

少陽―1 謂ふ所の「心・脇痛む」とは、言ふところは、少陽は戌也。<sup>5</sup> 戌は心の表るる所也。九月、陽気尽きんとして陰気盛んなり。故に心・脇痛む也。

「足臂十一脈灸経」の足少陽脈の病症に「脇痛」とあり、「陰陽十一脈灸経」の足少陽脈の是僮病に「心与脇痛」とあり、また経脈篇の膽足少陽脈の是動病に「心脇痛」とある。心痛は左胸部を中心とした疼痛をいう。<sup>6</sup> 足少陽脈は外眼角に起こり体の外側を下降するが、経路の途中では缺盆（鎖骨部のくぼみ）から掖（腋）に下り、胸を循り季脇部を過る。

戌・九月に配される十二消息卦は剝三三である。陰気が盛んで五爻の位置まで伸び、陽気が將に尽きようとし

ている。その結果、少陽脈に病が発して、胸部と季脇部に痛みがでる。

少陽—3 謂ふ所の「甚だしければ則ち躍る」とは、九月、万物尽く衰へ、草木畢く落ちて墮つ。則ち氣陽を去りて陰に之く。氣盛んにして陽の下 長ず。故に躍ると謂ふ。

「甚則躍」は、脈解篇に始めてみえる病症である。

剝卦の象伝に、「往く攸有るに利あらざるは、小人長ずる也」と。『集解』引く鄭玄注に、「陰氣 陽を浸し、上り五に至る、万物零落す、故に之を剝と謂ふ也、五陰一陽、小人極めて盛んにして、君子之く所有るべからず、故に往く攸有るに利あらざる也」と。剝は剝落の意味である。陰が下から成長して五爻の位置まで上り、残る一陽が今にも剝ぎ落とされ、尽きようとしている。陰が盛んになり陽の衰える時、草木が枯れて葉を落とす時、小人が榮えて君子が困窮する時である。「氣盛而陽之下長」を、剝卦の象に従い、陰氣が盛んになって一陽の下に成長する意味にとり、上のように読んだが、歴代の注は「(陰)氣盛んにして陽 下に之き長ず」と読む。また、誤脱を疑う者もあり、難読の文である。楊上善は「陰氣地上に盛んにして、陽氣地下に在り、万物の根を勇動して、其の内をして長ぜしむ」と注し、地下に在る陽氣が万物の根を成長させるように、陽氣が兩足に降りるから「躍る」のだと解釈する。

陽明—1 謂ふ所の「洒洒振寒す」とは、陽明は午也。五月、盛陽の陰也。陽盛んにして陰氣之に加ふ。故に洒洒振寒する也。

「陰陽十一脈灸経」の足陽明脈に「是僅則病洒洒病寒」と、経脈篇の胃足陽明脈に「是動則洒洒振寒」とある。ぞくぞくとさむけがすること。

午・五月に配される消息卦は姤☱☵である。盛んなる陽に一陰が加わるが、この陰は壮んなる陰である。姤卦の卦辞に「女壮んなり、用て女を取るなかれ」と。『集解』引く鄭玄注に「一陰 五陽を承く、一女 五男に当る」と。同じく虞翻注に「巽は長女なり、女壮んにして、傷る也、陰 陽を傷る」と。姤卦の内卦☱は巽で、説卦伝に「長女と為す」と。一陰ながらも勁猛なる陰氣がにわかにか陽に加わるとぞくぞくとさむけがする（楊上善注）。陽明—2 謂ふ所の「脛腫れて股収まらず」とは、是れ五月、盛陽の陰也。陽は五月に衰へて、一陰氣上り、陽と始めて争ふ。故に脛腫れて股収まらざる也。

この病症は他にはみえない。類似の文は、『靈樞』経脈篇の第三段（『太素』十五絡脈）の絡脈の経路と病症を述べる部分に「足陽明の別、名づけて豊隆と曰ふ。…其の病：虚すれば則ち足収まらず、脛枯る」とみえる。注釈の部分には「洒洒振寒」のそれとほぼ同じ。病症と注釈の関連はよくわからない。楊上善注に「腰已上を陽と為し、腰以下を陰と為す。五月、一陰氣有り、下に在りて始めて生じ、陽と交争す。陽強く上に実し、陰弱く下に虚す。故に脛腫れ、股収まらざる也」と。身体の陰分に陰氣が不足しているために腰から下が虚し、脛が腫れて股関節が弛緩する。「股不收」の意味はよくわからない。

太陰—1 謂ふ所の「脹を病む」とは、太陰は子也。十一月、万物の氣皆中に蔵さる。故に脹を病むと曰ふ。『足臂十一脈灸経』の足泰陰脈に「其の病：腹痛み、腹張（脹）り、…食を香（嗜）まず、善く意（噫）す」と、「陰陽十一脈灸経」の足太陰脈に「是れ動ずれば則ち上□心に走り、腹をして張（脹）らしめ、善く噫し、食へば歐（嘔）かんと欲するを病む。後と氣とを得れば則ち快（快）然と衰ふ」と。腹がはつて、よくおくびがでて、食べるとはきそうになる。その症状は大便秘とガスがでるとすうつとしりぞく。<sup>(8)</sup> また経脈篇の脾足太陰脈に「是

れ動ずれば則ち：食へば則ち嘔き、胃脘痛み、腹脹れ、善く噫するを病む。後と氣とを得れば則ち快然と衰ふるが如し」と。

子・十一月の消息卦は復<sub>三三</sub>である。一陽が始めて下に生じ、陽氣が動きだす時であるが、その陽氣はなおまだ地中に在る。乾卦の文言伝にいうところの「潜龍用ゐるなかれ、陽氣潜藏す」る時である。「集解」引く何妥注に「十一月に当りて、陽氣動くと雖も猶ほ地中に在り」と。人体においては、十一月は陰氣が盛んなときであり、陰氣が内に聚るときである。生じたばかりの一陽の氣はまだ微弱であり、外に通じることができない。それゆえ、腹がはるのである（楊上善注による）。

太陰―4 謂ふ所の「後と氣とを得れば則ち快然として衰ふ」とは、十一月、陰氣下に衰へて陽氣且に出でんとす。故に後と氣とを得れば則ち快然として衰ふと曰ふ也。

この病症も「陰陽十一脈灸経」と経脈篇にみえた。

十一月は陰氣が盛んで内に聚るために、腹が脹る病状が現れるが、下に一陽が現れて陽氣が出ようとするときでもある。この下に在る陽氣の力で腸内の便とガスがうまく体外に排出されれば、快然と腹の脹れる症状がとれるという。

少陰―2 謂ふ所の「嘔欬し、上氣して喘ぐ」とは、陰氣下に在り、陽氣上に在り。諸もろの陽氣浮きて、依り従ふ所無し。故に嘔欬し、上氣して喘ぐ也。

「陰陽十一脈灸経」の是動病に「喝喝として喘ぐが如し：欬すれば則ち血有り」と。所産病に「上氣：欬」とある。経脈篇の是動病に「欬し唾すれば則ち血有り。喝喝として喘ぐ」と、所生病に「上氣」とある。ただし、



「欬則有血」は後で別に取り上げられて注釈を加えられているから、ここの「嘔欬」は他にはみえない付加文である。是動病の病症は、五藏六府の欬を分類する『素問』欬論篇の「肺欬の状、欬して喘息し音有り、甚だしければ則ち血を唾す」とほぼ一致している。

申・七月の消息卦は否☷☶で、三陽が上に、三陰が下に在り、天氣が上昇して降らず、地氣が沈下して上昇せず、天地の二氣が交わらないとき、陰陽二氣が隔絶するときである。人体でも、陰氣と陽氣が和せず、陽氣が上昇して、喘ぎ、よく嘔欬する。

以上を病症の注釈部分と消息卦についてまとめると、次のようになる。(ただし、厥陰の1、少陰の1は本文では取り上げていない。)

正月・寅・泰☳☰・太陽(全七病症)

1 「正月、太陽、寅、寅、太陽也。正月、陽氣出在上、而陰氣盛、陽未得自次也。」

4 「陽氣万物盛上而躍。」

三月・辰・夬☳☱・厥陰(全四病症)

1 「厥陰者辰也。三月、陽中之陰、邪在中。」

五月・午・姤☳☴・陽明(全八病症)

1 「陽明者午也。五月、盛陽之陰也。陽盛而陰氣加之。」

2 「是五月、盛陽之陰也。陽者衰於五月、而一陰氣上、与陽始争。」

七月・申・否<sup>三三</sup>・少陰（全八病症）

1 「七月、万物陽氣皆傷。」

2 「陰氣在下、陽氣在上。諸陽氣浮、無所依從。」

九月・戌・剝<sup>三三</sup>・少陽（全三病症）

1 「言少陽戌也。」九月、陽氣尽而陰氣盛。」

3 「九月、万物尽衰、草木畢落而墮、則氣去陽而之陰。氣盛而陽之下長。」

十一月・子・復<sup>三三</sup>・太陰（全四病症）

1 「太陰、子也。十一月、万物氣皆藏於中。」

4 「十一月、陰氣下衰、而陽氣且出。」

注釈文と消息卦を対照すると、陽明の1・2、少陰の2、少陽の1・3、太陰の4の注釈文は、明らかにそれぞれ月の消息卦の陰陽消長について記述するものである。象数易においては、卦爻および曆のうえに現わされた陰陽消息観によって、卦爻辞の新しい解釈が行なわれ、人事の占候が行なわれた。脈解篇の作者は、経脈の病にたいしてそれを行なおうとしたのである。その注釈のスタイルは、「十二月卦は孟氏章句より出づ。其の易を説くや、氣に本づき、而る後に人事を以て之を明らかにす」という象数易の方法をそのまま踏襲しているといつてよい。注釈のスタイルからみて、三陰三陽説によって捉えられた脈の病症は、おそらく当時の医家にとつて既に『易』の卦爻辞にも擬せられるほどの權威を有していた、と推測することも許されよう。

しかし、上にみたのは「腫、腰腫痛」「心脇痛」「甚則躍」「洒洒振寒」など、比較的簡単な病症記述にたいするものばかりであった。より複雑な病症記述については消息卦に現わされた陰陽消長の象によるだけでは説明し切れないし、前後に矛盾も生じてくる。また消息卦は具象的であるがゆえに説得力も強いが、その分融通性に欠けるところがあるのは否めない。したがって、つぎに引用するような簡単な病症記述においてさえ、本の消息卦の象から離れた説明がなされている。

太陽―5 謂ふ所の「甚だしければ則ち狂・顛疾」とは、陽尽く上に在りて陰氣下に従ひ、下虚し上実す。故に狂・顛疾也。

病症の注釈にたいする楊上善の注は、「三陽又 三陰と争ひて、三陽俱に勝ち、尽く頭に在るを、上実と為す。三陰下に従ふは、即ち下虚と為す。是に於いて病を発し、衣を脱ぎ上に登り、馳走して妄言す、即ち之を狂と謂ふ。僵仆して倒る、遂に之を顛と謂ふ也」と。正月の消息卦である泰☱☷に具現された陰陽の気の正常な在りようでは、三陽の氣は下に在らねばならない。しかし、陽氣の勢力が強すぎて陰氣の位を犯せば、陽氣が上に実し、為に下が虚してしまう。その結果、狂と顛疾の病が発するという。同様に消息卦を離れた注釈の例は、太陽の3、陽明の3・4、厥陰の3・4にもみえる。

## 二、時令にもとづく病症注釈例

つぎに、消息卦の具象から一步後退して、より融通性のある時令の陰陽消息にもとづいて病症の注釈をしてい

ると思われるものを検討する。

太陽―2 「偏虚し跛を為す」とは、正月陽氣凍解地氣而出也。謂ふ所の「偏虚す」とは、冬寒く頗る足らざる者有り。故に偏虚して跛を為す也。

「偏虚為跛」は、半身が虚して跛行すること。この病症はこのままの文では他にみえないが、「足臂十一脈灸経」には、「足小指の廃を病む」とあり、足の小指の不随と解釈されている。<sup>(1)</sup>「陰陽十一脈灸経」の所産病は「足小指痺」とし、経脈篇の所生病は「小指不用」とする。厥の種類・病状・病因を論ずる『素問』厥論篇に三陰三陽の六経脈の厥を説く条がある。そこに、「巨陽の厥は則ち腫首・頭重、足行く能はず、発して胸仆を為す」と。「巨陽」とは、「陰陽十一脈灸経」が「鉅陽」に作るのと同じで、足太陽脈を指す。足の太陽脈の氣が逆上すると、頭部の腫れや頭重感、歩行困難の症状等が現れる。

病症を注釈する「正月陽氣凍解地氣而出也」は、このままでは読み難い。だが、これが十二紀・月令の孟春之月の「東風解凍」にもとづいていることは疑いない。そこで、楊上善は、「正月已に三陽有り、故に凍解け、陽氣地に出づる也」と解釈する。前後の文の内容からみて妥当な解釈と思われる。次の「冬寒頗有不足者」について、楊上善は泰卦の象を踏まえて注をつける。「先に三陰有り、故に猶ほ冬寒有り、陽氣足らざる也。人身も亦爾り、半陽足らず、故に偏虚す」と。正月の陰陽の氣は、泰卦☰☷に具現されているように三陽の氣が凍を解かして地上に現れているが、一方では三陰の氣がまだ陽氣の上にあり、全身を満たすには陽氣が不足している。したがって半身の陽氣が虚して跛行するのである。

少陽―2 謂ふ所の「反側すべからず」とは、陰氣物を蔵する也。物蔵せらるれば則ち動かず。故に反側

すべからざる也。

「陰陽十一脈灸経」の是僮(動)病に「不可以反稷(側)」と。また経脈篇の是動病に「不能転側」とある。胸部や脇腹の痛みのために寝返りをうつことができないこと。

月令・季秋之月に、「是の月や、申ねて厳しく号令し、百官に命じて貴賤をして内に務めざること無く、以て天地の蔵を会めて、宣出すること無からしむ」と。秋の終りの月は、五穀の收穫を終え屋外での労働を終えて万民が室内に入る時である。万物も静かに動かなくなる時である。次の一例も時令の陰陽觀を踏まえたものと解してよいだろう。

少陰—5 謂ふ所の「恐るること人將に之を捕へんとするが如し」とは、秋氣、万物未だ畢くは去ることを得ず、陰氣<sup>(1)</sup>少なく、陽氣入れば、陰陽相薄る。故に恐るる也。

この症状は、「陰陽十一脈灸経」の是動病、経脈篇の是動病にみえる。ここはおびえて、他人がいまにも捕まえてくるのではないかと心配する。

七月は、秋の始めて、肅殺の氣によつて万物は衰弱し始めるが、まだ悉く枯れ落ちるにはいたらぬ。また「涼風至り、白露降る」(月令、孟秋之月)が、まだ寒氣は弱く、ときには暑さがぶり返す。しかし、その暑さもまた強くない。陰氣が少ないところに陽氣が侵入し互いにおつかりあうが、二氣ともに弱く、どちらも勝てず互いに恐れるかのようである。故に恐れるという(楊上善注による)。次の例は、二つの病症の組み合わせられた記述にたいして、消息卦と時令の両方を用いて注釈する例である。

少陰—3 謂ふ所の「邑邑<sup>(2)</sup>として久しく立つ能はず、久しく坐して起きんとすれば則ち目眈眈<sup>(3)</sup>として見る所

無し」とは、万物の陰陽定まらず、未だ主有らざる也。秋氣始めて至り、微霜始めて下りて方に万物を殺さん」とす。陰陽内に奪ふ。故に目眩暈として見る所無き也。

「陰陽十一脈灸經」の是動病に「坐して起きんとすれば則ち目膜として見ること母きが如し」と。經脈篇の是動病に「坐して起きんと欲せば、目眩暈として見る所無きが如し」と。眩は「目明らかならざる」さま（『集韻』上三十七蕩）。すわつていて立ち上がろうとすると目の前がぼうつとすること。「邑邑不能久立」はほかにみえない。「邑邑」は不安で落ち着かないさま<sup>16</sup>。

七月は否卦が示すように、陰陽がともに三爻ずつあり、陰陽の氣が均しくどちらが主でもない。したがって、人においても氣が落ち着かず、長くは立っていられず、立ったり座ったりする。しかし、陰氣が次第に伸び、陽氣が衰えてゆくときであり、秋の肅殺の氣の働きの始まるときでもある。秋殺の氣によつて体内の陰陽の氣がともに不足すると、たちくらみする。

十二紀・月令では「霜始めて降る」のは季秋の月である。孟秋の月に「涼風至り、白露降る」というによれば、脈解篇の「微霜」は白露のことか。楊上善注に「本の露に作る有り…本の十月に作る者有り」とあるから、伝写の過程で七月を十月に誤り、ついで露を霜に誤つたのであろうか。

このように、病症記述がすこし複雑になると消息卦による注釈はすぐに限界を露呈する。そのことは、陽明脈の病症注釈（5・6・7）において最も顕著である。

以上、二章にわたつて考察したところから、脈解篇の方法を「陰陽消息觀—三陰三陽說—經脈病症」とまとめることができる。陰陽消息觀、特に第一章で考察した十二消息卦に具現された陰陽消息觀は象數易の宇宙論を構

成するものであるから、結局、脈解篇の作者は「陰陽消息觀—三陰三陽説」の關係を介して医学（経脈病症）を易の宇宙論に結びつけたとすることができる。次章以降では「象数易—医学」及び「三陰三陽説—医学」の關係を他の資料に基づいて考察してゆく。

### 三、象数易と医学

脈解篇が象数易の卦爻辞解釈の方法と経脈病症とを結びつけたことと関連して想起されるのは、『易緯通卦驗』である。緯書には医学に関する記述が散見しているが、『通卦驗』に最もまとまった記述がみられる。その巻下に、「坎震離兌之と爲す、每卦六爻、既に四時・二十四氣に通じ、人の四支・二十四脈も亦期に存す」（『重修緯書集成』巻一下、四九頁。以下巻・頁数のみを記す。）という。ここでは坎☵、震☳、離☲、兌☱四卦の二十四爻を一年の二十四氣に配当し、四卦の各一爻が二十四氣の各一氣を主る卦氣説の最も簡単な形が述べられ、さらに各一氣が人体の二十四脈の一つと対応させられている。ただし、二十四脈といっても実際には手足の三陰三陽による区別であり、しかも手の少陰脈が現われない十一脈が重複して配当されている。上の引用文に続く『通卦驗』の文中（巻一下、四九〇七十頁）には、具体的に二十四爻を二十四氣に配する言葉は現われないが、鄭康成注によれば以下の通りである。

☵☵坎 初六冬至。 九二小寒。 六三大寒。 六四立春。 九五雨水。 上六驚蟄。

☳☳震	初九春分。	六二清明。	六三穀雨。	九四立夏。	六五小滿。	上六芒種。
☱☱離	初九夏至。	六二小暑。	九三大暑。	九四立秋。	六五処暑。	上九白露。
☵☵兌	初九秋分。	九二寒露。	六三霜降。	九四立冬。	九五小雪。	上六大雪。

また『通卦驗』にみえる二十四氣と脈との対応は以下の通りである。なおへゝ内は鄭康成注を示す。

冬至	足太陰脈。	小寒	手太陰脈。	大寒	足少陰脈。
立春	足少陽脈へ足少陰へ。	雨水	手少陽脈へ手太陽へ。	驚蟄	足太陽脈。
春分	手太陽脈。	清明	足陽明脈。	穀雨	足陽明脈。
立夏	手陽明脈。	小滿	足太陽脈。	芒種	足太陽脈。
夏至	手陽脈。	小暑	足陽明脈。	大暑	手少陽脈。
立秋	足少陽脈へ手少陽へ。	処暑	手太陰脈。	白露	足太陰脈へ手太陰へ。
秋分	手少陽脈。	寒露	足厥陰脈へ手厥陰へ。	霜降	足厥陰脈。
立冬	手少陽脈。	小雪	心主脈。	大雪	手、心主脈。

鄭注に、「坎六三陰爻也、足に属す」「坎六四陰爻也、足に属する也」「坎九五陽爻、脈に于いて宜しく手太陽と為すべし、少陽と云ふは誤るに似たり」「坎上六陰爻、足に属す」といい、立秋に「人足は、例に（おいて）宜しく



手と言ふべし」といい、白露に「人足、例に於いて亦手と為す也」といい、寒露に「人足、例に於いて宜しく手と為すべき也」というによれば、二十四爻の陽爻には手脈、陰爻には足脈が配当されているようである。ただし、処暑と大雪も例によれば足脈とすべきであるが、注では言及されていない。

三陰三陽の配当法は明らかではない。おおむね陽気の消長に沿って配当されているが、一陰一陽と三陰三陽との関係を上の配当から推測することは難しい。鄭注も冬至に「二十四氣、冬至より芒種を陽と為す、其の位は天漢の南に在り、夏至より大雪を陰と為す、其の位は天漢の北に在り」（卷一下、四九頁）といい、雨水の注に「雨水以後を陽脈と為す」（同上五四頁）というに止る。しかし、少なくとも經脈は単に付記されているのではなく、三陰三陽を介して卦氣の中に有機的に結合されているということは言えるであろう。

『通卦驗』卷下の二十四脈を記載する部分は、二十四氣の時令の体裁を具えている。冬至を例に取れば、  
冬至。広莫風至る。蘭・射干生じ、麋角解け、曷旦鳴かず。

晷長丈三尺。陰氣去り、陽雲 其（箕）に出づ。葦末は樹木の状の如し。

其の当に至るべきに至らざれば、則ち万物大いに早き、大豆為らず。人の足太陰脈虚し、振寒を病むこと多し。未だ当に至るべからずして至れば、則ち人の足太陰脈盛んに、暴逆・臚張・心痛を病むこと多し。

大旱の応は夏至に在り。（卷一下、四九・五十頁）

ここで重要なことは、時令の違令災異に相当する部分が、「当至不至」と「未当至而至」の二つの場合に分析され占候として述べられていることである。

一年の季節の規則正しい巡りとは、気が当に至るべくして至ること、つまり、それぞれの季節にその季節に相

応しい陰陽の氣、すなわち寒暑や風雨が現われることを意味する。時ならぬ暑さ寒さや風雨は農業生産や人の健康にとって最大の脅威である。『通卦驗』はこの氣象の異常を「当至不至」と「未当至而至」とに分析した。「当至不至」とはその節氣に相應しい氣がその節氣になっても現われないことである。この場合、その節氣の氣が不足しているので、対応する経脈の氣も虚の状態になり、それに応じた病症が現われやすくなる。「未当至而至」は逆にその節氣に先んじて氣が現われることである。この場合にはその節氣の氣が過剰になり、対応する経脈の氣も盛、すなわち実の状態になり、それに応じた病症が現われやすくなる。

『通卦驗』のこの分析は、後に『素問』の六節藏象論篇や運氣論諸篇のなかで「運氣論」として展開され、運氣論は北宋時代には医学試験の必須科目として取り上げられるほどに医学の中に浸透して行く。なお、「後に」と述べたのは、『素問』の六節藏象論篇の運氣に関する部分と運氣論諸篇が、唐の王冰によって『素問』の編注の際に新たに補入されたものだからである。<sup>(18)</sup>

時令の違令災異の中に疾病を記載する例は『呂氏春秋』十三紀にみられる。例えば、「(孟春に) 秋令を行なへば、則ち民に大疫あり」「(季春に) 夏令を行なへば、則ち民に疾疫多し」と。『春秋繁露』五行順逆篇になると、「(木者春) 民 疥搔・温体を病み足脗痛む」「(火者夏) 民 血壅(癰) 腫を病み目明らかならず」のように、具体的な病症が記述されるようになる。『通卦驗』では、ついに『内経』医学の基礎理論である三陰三陽と経脈が記載されるにいたる。しかも、手足と三陰三陽によって分類される経脈は、上に述べたように四正卦の二十四爻と有機的に結合している。『通卦驗』の「当至不至」「未当至而至」の分析が他の時令の違令災異と並列される性格のものではないように、『通卦驗』所載の医学記事も十二紀や五行順逆篇からの量的な発展と考えられるものでは

ない。

『通卦驗』を始め、『易緯稽覽圖』及び『易緯乾鑿度』等に説かれている卦氣説は孟喜・京房の卦氣説を伝える者が作ったと言われる。<sup>(19)</sup>『通卦驗』に関して言えば、その作者は医学理論にもかなり通じていたように思われる。彼(等)は易・天文曆数から医学にわたる知識を持つ人(達)であった。一方、脈解篇が依拠する十二消息卦も孟喜・京房に始まるとされる。このことは、直ちにつきのような疑問を呼び起こす。すなわち、『内経』に収められている脈解篇は最初から医学の論文として撰述されたものなのか。医家が象数易の方法を借用したのではなく、むしろ易家が占いのために象数易の方法を経脈の病症に適用したと考えたほうがよいのではないのか、と。この疑問に今直接に答えることはできないが、「易は医の理を具へ、医は易の用を得」(張介賓『類経附翼』「医易義」という認識が『通卦驗』の作者と脈解篇の作者とによつて共有されていたと推測することは許されよう。すでに考察したように、経脈の病症を解釈するというよりはむしろ十二消息卦に具現された陰陽の消長を記述している脈解篇のような論文が、医学論文として受容されていたこと自体が、前漢末期から後漢の時代の知識分布や思想状況をよく照しだしていると言えるであろう。

唐の孫思邈は『千金要方』一書の冒頭に、「凡そ大医為らんと欲す」る者が必ず諳んじなければならぬ医学書を列記した後、「又須らく陰陽祿命・諸家相法及び灼龜五兆・周易六壬を妙解すべし。並びに須らく精熟すべし。此の如ければ乃ち大医と為ることを得」(卷一大医習業第一)と記している。明の張介賓も『類経附翼』のなかで、「易を知らざれば、以て太医と言ふに足らず」(卷一医易義)と孫思邈の言を相述する。<sup>(20)</sup>後世の医家が『易』と医学との関係をこのように捉えたのは、運氣論の盛行に与るところも大きい。しかし、その端緒はすでに『内

『経』の時代に開かれていたと言える。凡そ十六世紀降つた張介賓のつぎの言葉は、『通卦驗』の作者と脈解篇の作者の意をかなり正確に代弁しているように思われる。

天人相与の際、精なるかな、妙なり、誠に畏るべし。人身小天地、真に一毫の相間するも無し。今夫れ天地の理は、易に具る、而るに身心の理は、独り易に具らざらんか。矧や天地の易は、外易也。身心の易は、内易也。内外孰か親しからん、天人孰か近からん。：医の道為る、身心の易也。(同上医易義)

#### 四、三陰三陽

『通卦驗』と脈解篇の中で易と医とが結合し得たのは三陰三陽説が存在したからであろう。医学が既に三陰三陽説によつて理論的に把握されていたことが、一陰一陽の体系である易と医学との結合を容易に進行させた最も大きな要因であつたと考える。解決すべき課題は、三陰三陽を一陰一陽の下にどのように統合するかということである。『通卦驗』と脈解篇は、陰陽消息の中に三陰三陽を位置づけることによつてこの問題を解決しようとした。かくして、「易—陰陽消息の理—三陰三陽説—医学」という図式の下に、「易は医の理を具へ、医は易の用を得」と言うことが可能になる。しかし、この図式は『内経』医学の全体を覆うものではなかつた。次に『内経』内部における三陰三陽の役割と評価をみることにしよう。

三陰三陽は、現存する資料では馬王堆から出土した医帛書のなかに始めてみえる。そして、帛書中の二つの「灸経」は、灸療法を主体とする帛書の医学が三陰三陽説によつて理論的に把握されはじめた初期の段階を示す論文

であろうと推測されている<sup>(21)</sup>。帛書の「陰陽脈死候」に「凡そ三陽は天氣なり。其の病、唯だ骨を折り膚を列（裂）くのみは死せず。凡そ三陰は地氣なり。死脈なり<sup>(22)</sup>」とあり、ある時期から三陰三陽が天地の陰陽の気に関わるものと観念されていたことは了解されるが、三陰三陽説の起源についてはまだ知られていない。ともかく、『内経』は三陰三陽説を重要な医学理論として継承し、新しい治療技術として登場した針法に対応する理論を形成していった<sup>(23)</sup>。

『内経』には、熱病、瘧疾、厥病などの病症を三陰三陽の六経脈によって把握しようとする論文が収められている。『素問』厥論篇の第四段は、厥病の症状を三陰三陽の六経脈の厥としてまとめ、『素問』刺瘧篇の前段は、瘧疾の症状とその治療法を足の三陰三陽脈の瘧としてまとめている。そこに記載されている病症には、脈解篇や經脈篇にみえるものと共通するものも少なくない。『素問』四時刺逆從論篇の第一段は、經脈の「有余」と「不足」によって起こる病症を記載しているが、やはり三陰三陽によって捉えられている。『素問』熱論篇は、寒邪の侵襲を受けて起きる熱病の、邪の侵入経路、各段階の症状及び治療過程を三陰三陽によって分析している。これらの論文の存在は、病症の分野を広く三陰三陽説によって理論的に把握しようとした人々が存在していたことを示している。しかし、彼等が一つの学派を形成していたのか、特定の時期に活躍したのかは、明らかではない。だが、病症を三陰三陽によって分析しようとする思考が確かにあったということは重要である。そこから一つの問いが導かれる。すなわち、病症を三陰三陽説によって捉えるとき、どのような診断法、特に脈診法が用いられたのかということである。『内経』の中でこれに対応しているのは、經脈篇に記載されている脈診法、すなわち人迎寸口診である。その方法は人迎部と寸口部の強弱の差を比較して、その度合と部位の組み合わせで三陰三陽の六経

脈のいずれに病があるかを決定するものである。経脈篇には手足の三陰三陽の十二経脈の完成された記述がある。にもかかわらず、各経脈の記述の最後に付加されている脈診法は、手足の区別をしない三陰三陽の六経脈だけをいうものである。とすれば、『内経』の中に、三陰三陽説を主たる医学理論とし、それによつて病症を整理し、脈診を行ない、治療を行なう医療技術の体系が存在していたと考える余地がある。だが、この問題についてこれ以上の考察を行うことは小論の範囲を越える。

ちなみに、『内経』においては試行錯誤の段階にあつた三陰三陽説は、やがて薬物療法の書である『傷寒論』の六経弁証において理論としての一つの頂点に達し、医学の中に確固たる地位を築くにいたつた。

脈解篇も医学理論としての三陰三陽説を継承するものである。だが、脈解篇の意義は三陰三陽説を一陰一陽の陰陽消息観と結合したところにある。脈解篇の文中には撰述の意図を語るものは見られないが、それを推測するてがかりが『素問』陰陽離合論篇に記されている。陰陽離合論篇の冒頭の文に、

黄帝問ひて曰く、「余聞く、天を陽と為し、地を陰と為す。日を陽と為し、月を陰と為す。大小の月、三百六十日、一歳を成す。人も亦之に応ず。今三陰三陽、陰陽に応ぜず。其の故何ぞや。」

岐伯対へて曰く、「陰陽は、之を数ふれば十にすべく、之を推せば百にすべく、之を数ふれば千にすべく、之を推せば万にすべし。万の大は勝つて数ふべからず。然れども其の要は一なり。」

人は天地陰陽の理に従うものであるのに、医学の三陰三陽と天地の陰陽ではその数に不一致があるのは何故か。この問いにたいする答は、陰陽の変化は窮まりなく、数えあげることができないが、つまるところは一陰一陽に

帰着するというものである。この文章につづいて、陰陽離合論篇の作者は、身体を前後・上下・表裏に区分することによって三陰三陽を説明しようとする。その内容には不明な点が多いが、少なくとも医学の内部において陰陽説の立場から三陰三陽説が問題にされていたことはたしかである。そして、陰陽離合論篇と脈解篇は同じ問いにたいして異なる回答をしているが、両者には共通点がみられる。それは一陰一陽をより根本的な理論として認識していることである。

しかし、一陰一陽の下に三陰三陽を位置づけたとしても、まだ残された問題がある。脈解篇については、三陰三陽を十二支・十二月にどのように配当するかということである。本来、この配当がしかるべき根拠に基づいて行なわれるのでなければ、その後が続く病症の注釈は全く無意味なものでしかないはずである。しかし、配当の根拠を示す字句を脈解篇の中に見出すことができないばかりでなく、配当自体から配当原則を推定することもできない。脈解篇はただ「厥陰は辰なり」「陽明は午なり」等等と宣言するだけである。ただし、太陽―少陰、少陽―厥陰、陽明―太陰という表裏関係は、それぞれ一・七月、三・九月、五・十一月に配されることによって守られている。

『素問』陰陽類論篇には、三陰三陽を陰陽の多少に還元しようとする試みが見える。そこでは、太陽が三陽、陽明が二陽、少陽が一陽とされ、太陰が三陰、少陰が二陰、厥陰が一陰とされている。しかし、これによって脈解篇の配当を全て矛盾なく説明することはできない。また、『靈樞』陰陽繫日月篇では、足の十二経脈（三陰三陽で六脈、左右あわせて十二脈）を十二月・十二支に対応させ、手の十経脈（厥陰をのぞく二陰三陽で五脈、左右あわせて十脈）を十干に対応させる。しかし、これもまた脈解篇の配当と全く一致しない。

脈解篇を始めとするいくつかの論文が、一陰一陽と三陰三陽とを関係づけながら、関係の具体的な内容をついに明確に提示し得なかつたことは、三陰三陽説が元来一陰一陽とは無関係に形成されたことを示唆しているのではなからうか。由来はともあれ、『内経』の中心理論の一つとなつた三陰三陽説が、試行錯誤のうちにも一陰一陽説の中に統合されてゆく流れが存在していたということだけは言えるであろう。

## 五、医学と天人相関説

小論を終えるにあたって、象数易の宇宙論を含めた天人相関説が医学にたいして果たした積極的な役割について述べ、脈解篇のような論文が医学論文として受容された理由の一端を考えることにする。

前漢中頃までの天人相関思想は、『淮南子』精神訓や『春秋繁露』人副天数篇の文章に代表される。そこに表現されている考えは、「其の数ふべきに於いては数に副ひ、数ふべからざる者は類に副ふ」（人副天数篇）という文に要約されている。天と人とは数の上で一致するか、さもなくば類比しており、それはとりもなおさず、天と人とが合一であることの証明である、という考えである。『内経』の中でこれに対応するものとしては、例えば『靈枢』邪客篇の「天有四時、人有四肢。天有五音、人有五藏。天有六律、人有六府。…天有十日、人有手十指。…地有十二経水、人有十二経脈。…歳有十二月、人有十二節」などを挙げることが出来る。<sup>24</sup>

しかし、単に天と人との間に要素の対応や類比があるということを超えて、天体の運行周期と人体の生理との間にはなんらかの関係があることは早くから気づかれていた。一年の季節のめぐりや昼夜の交代ばかりでなく、



月の盈虚も人体生理との関係が注目されていた自然のリズムの一つである。馬王堆「却穀食氣篇」には、

穀を去（却）くる者は、石草を食ふ。朔日に質を食ひ、日に一節を駕（加）へ、旬五にして止む。月の大初

銑（眺）に、日に一節を去り、晦に至りて質に復す。月と与に進退す。

と、穀物を絶つて石草を食べるときに、その摂取量を月の盈虚に合せて増減するように説かれている。<sup>(25)</sup> この考え方をそのまま治療に適用したものが『内経』にみえる。「素問」繆刺論篇（『太素』量繆刺）に、

凡そ痺の往来して行くに常処無き者は、分肉の間に在り。痛めば之を刺し、月の死生を以て数と為す。針を用ゐる者は、氣の盛衰に随ひ、以て瘡数と為す。針其の日数を過ぐれば則ち氣を脱<sup>し</sup>ひ、日数に及ばざれば則ち氣写せられず。左は右を刺し、右は左を刺す。病已ゆれば止む。已えざれば、復た之を刺すこと法の如し。一月生じて一日一瘡。二日二瘡。漸く之を多くし、十五日十五瘡。十六日十四瘡。漸く之を少くす。

針刺の数を月の朔望の日数にあわせて増減するところは、「却穀食氣篇」と全く同じ考えに基づくものである。<sup>(26)</sup> 月の盈虚は後に象数易の月体納甲説において易の八卦に現わされた陰陽の消長と結びつけられる。月体納甲は『周易参同契』及び虞翻易説にみえる。<sup>(27)</sup>

「却穀食氣篇」及び繆刺論篇は、辟穀のための石草の摂取量や病氣治療のための針刺の数を月の朔望のリズムに合致させようというものであるが、さらに明確に人体の生理学的リズムと月の朔望のリズムとの一致をいうのは、『靈枢』歳露論篇（『太素』三虚三実）である。そこに、

人は天地と相参ずる也。日月と相応ずる也。故に月満つれば則ち海水西に盛んに、人の血氣積<sup>(28)</sup>み、肌肉充ち、皮膚緻かく、毛髮堅く、腠理卻し、煙垢著す。是の時に当りては、賊風に遇ふと雖も、其の入ること淺くて

深からず。其の月郭の空なるに至れば則ち海水東に盛んに、人の氣血虚し、其の衛氣去り、形独り居り、肌肉減じ、皮膚縦み、腠理開き、毛髮残はれ、腠理薄く、煙垢落つ。是の時に当りては、賊風に遇へば則ち其の入ること深く、其の人を病ますや卒暴たり。

月の満ちかけによって引き起こされる潮汐の周期と人体の生理学的リズムとの間には相関係数があり、外から人体を侵襲する外因としての邪が引き起こす病氣も、このリズムとの関係で結果を異にするとされる。

また、人体内部を循環する氣の生理学を述べる『靈樞』五十營篇・衛氣行篇では、營氣・衛氣が人体の二十八脈を一昼夜に五十周することと、太陽が周天の二十八宿を一日に一周することが関係づけられている。<sup>(29)</sup>

上に述べたような、天体の運行周期に代表される自然界の規則性と人体の生理的な現象との間になんらかの相関関係を認めようとする考え方は、医学の中に一つの重要な局面を切開くものであったと考える。自然界の周期性・規則性は、天人相関説の下で人体に適用され、医学は人体内部の規則性や恒常性にたいする認識を深めていったと推測される。さらに象数易において陰陽消息が卦爻及び曆の上に具現されるにいたって、自然界のさまざまなリズムが陰陽消息の理として把握されるようになる。脈解篇の成立及び医学論文としての受容は、そのような文脈の中で理解することができるであろう。消息卦によって『易』の全經文を解釈することは不可能であるように、象数易の陰陽消息觀をもって經脈の病症を解釈しようとする脈解篇の試みも完全に成功したとはいえない。しかし、その妥当性がどうであれ、人体の生理的リズムを理論的に、すなわち陰陽消息觀によって把握しようとすることは、『内經』医学の当時の重要な課題であったのである。

注

- (1) 『内経』のテキストは以下のものを用いた。明顧從徳重雕本『黄帝内経素問』（国立中国医薬研究所出版。民国六十八年九月第三版）。四部叢刊所収『黄帝内経靈樞』。仁和寺藏鈔本『黄帝内経大素』（東洋医学善本叢書所収影印、オリエント出版社、一九八一）。
- (2) 馬王堆三号墓の墓葬年代は漢文帝の十二年（前一六八）である。（「長沙馬王堆二・三号漢墓發掘簡報」参照。『文物』一九七四、七）。出土医書中、「足臂十一脈灸経」「陰陽十一脈灸経」「脈法」「陰陽脈死候」「五十二病方」の五部の帛書の抄写年代は使われている字体から大体秦漢の際と推定されている。（馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書』肆、二頁参照。文物出版社、一九八五）。記載されている医術の内容から見て出土医書は先秦の医術を伝えるものと考えられる。なお、馬王堆出土帛書医書を引用する場合は、『新発現中国科学史資料の研究 訳注篇』（京都大学人文科学研究所、一九八五）をテキストとして用いた。
- (3) 山田慶児『黄帝内経』の成立 九七頁参照。『思想』一九七九、八。岩波書店。
- (4) 『素問』は十月に作り、『太素』は七月に作る。楊上善注に、「有本作露、但白露即露之微也。十月已降甚霜、即知有本作十月者非也」と。
- (5) 『素問』は盛に作り、『太素』は戌に作る。下の戌も同じ。
- (6) 前掲『新発現中国科学史資料の研究 訳注篇』一〇六頁参照。
- (7) 『經典積文』、「馬融曰、剝、落也」。
- (8) 前掲『科学史資料の研究 訳注篇』一一七頁参照。
- (9) 『素問』は十二月に作り、『太素』は十一月に作る。
- (10) 否卦、大象、「象曰、天地不交、否」。『集解』、「宋衷曰、天地不交、猶君臣不接。天氣上升而不下降、地氣沈下、又

不上升。二氣特隔。故云否也」。

- (11) 『新唐書』曆三上に載せる一行の「其六卦議」。
- (12) 前掲『科学史資料の研究 訳注篇』九〇頁。同注に、「淮南子」覽冥訓、「走獸廢脚」、「廢脚、跛蹇也」と。
- (13) 『素問』は得を有に作る。『太素』は得に作る。
- (14) 『素問』作色色、『太素』作邑邑。
- (15) 『素問』作眈眈。『太素』作眈眈。以下同じ。
- (16) 『荀子』哀公篇、「心不知色色」。「集解」、「盧文昭曰、大戴礼作志不邑邑。郝懿行曰、色当為邑、字形之誤、大戴記作志不邑邑。楊注甚謬。邑邑与悒悒同。悒悒、憂逆短氣貌也。』説文、「悒、不安也」。
- (17) 二十四爻の二十四氣への配当は『易緯乾元序制記』(卷一下、九四頁)にもみえる。『易緯乾元序制記』は偽作視されているが、そこに見える象数理論は京房の学説に親近性を有することが指摘されている。武田時昌『易緯乾元序制記』所載の易緯佚文について、参照。(『中国思想史研究』第十号所収。京都大学中国哲学史研究会、一九八七)。
- (18) 石田秀実『中国医学思想史』第五章第一節「新理論としての運氣論」参照。東京大学出版会、一九九二。
- (19) 鈴木由次郎『漢易研究』一七一頁参照。明德出版社、昭和三十八年。
- (20) 『医易会通精義』四頁参照。人民衛生出版社、一九九一。
- (21) 山田前掲『黄帝内経』の成立』一〇四頁参照。
- (22) 前掲『科学史資料の研究 訳注篇』一三三〜四頁参照。
- (23) 山田慶児『針灸と湯液の起源』参照。とくに二一・五七頁。『新発現中国科学史資料の研究 論考篇』所収。京都大学人文科学研究所、一九八五。
- (24) 他にも『素問』陰陽別論篇・金匱真言論篇、『靈枢』経別篇・本藏篇・経水篇・海論篇等に同様の文がみえる。
- (25) 前掲『科学史資料の研究 訳注篇』二九五頁参照。他にも『朔日』『月晦日』『月十六日』を選んで呪術的治療を行

なうことが、馬王堆帛書「五十二病方」にみえる。『科学史資料の研究 訳注篇』一八六・一八七・二二二頁。

(26) 繆刺論篇では、その他にも「邪客於臂掌之間」「邪客於足太陰之絡」と「邪客於足少陽之絡」の場合に「以月死生為疢数」という。

(27) 鈴木前掲『漢易研究』二四〇・六〇二頁参照。

(28) 『太素』作精。『靈枢』『鍼灸甲乙経』作積。

(29) 山田慶児「九宮八風説と少師派の立場」二二二頁、東方学報・京都、第五十二冊。石田前掲『中国医学思想史』一四三〜四頁参照。